

2017年11月中旬のある朝、ミラノの Cadorna 駅から Boccaccio 通りを、冷たい風の中、肩をすくめて歩く二人連れの姿があった。妻と私である。今回は初めての仕事抜き海外旅であり、結婚記念日を北イタリアで二人で迎えようという誠に美しい企画なのであった。旅のコンダクターは妻で、10日余りの旅程はすべて彼女が決定した。彼女はそのような計画の才に恵まれているのだが、いかんせん方向感覚に疎い。かつてカナダのバンクーバー島で、対岸に戻るフェリーに乗るため急いで車を走らせていた時、どう考えても波止場は右側の海にあるのに、突然運転していた彼女が左にハンドルを切って山を登り始めたことがあって、その弱点は顕わになった。したがって今回の旅行における私の最も重要な役割は、方向指示器あるいは伴走者といったものである。

ミラノでのこの日の行先は Santa Maria Delle Grazie 教会であった。すでにご存じの方も多いだろうが、ここにはあのレオナルド・ダビンチの描いた「最後の晚餐」があるのだ。事前予約すれば約20人一組で「最後の晚餐」のある会堂に入り、15分間だけではあるがじっくりとこの絵を見ることができる。この訪問は、バッハの受難曲をこよなく愛している私に対する妻の配慮なのでもあった。当然のことながら、私の視線は絵の中のマタイとヨハネにと向けられる。

不思議なことに「最後の晚餐」の中のヨハネは女性的な優しさを漂わせた姿で描かれていて(右図の右側)、バッハのヨハネ受難曲の雰囲気とは全く異なっているのである。バッ

ハは、聖書の「ヨハネによる福音書」18章と19章の内容を曲にしただけなので、別にヨハネ自身がどのような姿かたちをしていても



関係ないのだけれども、愛と悔恨の情がにじみ出てくるような美しいマタイ受難曲と違って、怒りと人間の残忍さが強調され攻撃的な側面が顕著なヨハネ受難曲

を思うとき、この「最後の晚餐」のヨハネにはある種の違和感を持たざるをえない(もともと、本当に怒ると怖いのは女性の方なので、その表面的なやさしさと深奥の怖さはヨハネ受難曲と似ているとも言える)。

このヨハネは「イエスの愛しておられた弟子」として知られており、実は女性あるいは少年、さらには理想の弟子を表す架空の存在だとする説もあるようなのだ。そこでダビンチはヨハネをそのような女性的な姿として描いたのかもしれない。何しろ2000年以上前の話なので、何が真実かは宗教学者だってわからないのだろうと思うが、いずれにせよ「ヨハネによる福音書」を書いたその人物(つまりヨハネ)は、イエスの愛弟子としてすぐ近くにいて、その捕縛から磔まで間近に見ていたとされている。そこに書かれている民衆、祭司たち、ピラト、兵卒たちとイエスの間で交わされるやりとりは臨場感に富み、息を引き取るまでのイエスを取り巻く状況を直截に生々しく伝えている。信仰深かったバッハはその中から様々な怒りの表情を拾い上げ、曲に組み込んでいったのだろう。それがヨハネ受難曲に苛烈な表現を与えているような気がするわけである。

<カール・リヒターのこと>

受難曲について書く前に、どうしてもリヒターのことを書きたい！

カール・リヒターは20世紀最高のバッハ受難曲の演奏家とされている。例えばそのマタイ受難曲の録音はいまだに最高の「マタイ」と言われているのだが、私は二十歳の時、来日したリヒター指揮ミュンヘン・バッハ管弦楽団・合唱団の「マタイ」を生で聴いているのだ。その時の感激がもとで、7年前に初めて合唱に挑戦し、自分自身でマタイを歌ったことは前にも書いた。このリヒター来日公演のマタイは、多くの評論家、音楽家、文筆家によってその後もいろいろな所で話題にされている。先日、その時来日したオケのフルート奏者、パウル・マイゼンのインタビュー記事を読んだ。面白かったので、その一部を許可なく引用してしまおう。「日本公演は真のハイライトでした。舞台から発せられるカール・リヒターのオーラはもちろんですが、観客から放たれる反射的な作用もまた印象的



でした。壮麗で大きな東京文化会館のホールが、今も私たちの記憶に焼き付いています。会場は満員御礼で、聴衆は手元に歌詞を印刷した冊子を持っていました。彼らはそれぞれにドイツ

語の歌詞を目で追い、全員が同時にページをめくりました。我々奏者には、彼らが一斉にページをめくったことがわかりましたが、雑音は全く聞こえませんでした。素晴らしい集中力です。これは私の生涯で最も感銘深い《マタイ受難曲》になりました。あのまとまり、聴衆と奏者の一体感には、寸分の隙もありませんでした。全体が一つになったのです。私にとって、あれこそが本当の《マタイ受難曲》の体験でした。」（「カール・リヒター生誕90周年記念：不滅のバッハ伝道師」、文芸別冊、河出書房新社）

この聴衆の中にいて一斉にページをめくっていたことは私の生涯の誇りと言うべきかもしれない。それにしても、聴衆の「譜(?)めくり」がこのように演奏者に感銘を与えていたのかと思うと、我々の譜めくりのタイミングはさらに重要なものだと思った方がよさそうである。今後はより注意を払いたいものである。

リヒターは、マタイよりもヨハネ受難曲の方を好んだと言われている。私は彼の次の来日公演が決まった時、今度はぜひヨハネを聴こうと計画したのだったが、彼が直前にミュンヘンで急死してしまい果たせなかった。せめて、リヒターが重要視したというヨハネ受難曲を私自身がしっかり歌うようにしたいと思うのである。ちなみに指揮者の郡司先生によると、「ヨハネ受難曲は圧倒的に高いレベルの音楽で、マタイの数倍は難しい」ということである。

<バッハの受難曲というもの>

聖書にはイエスの弟子たちがそれぞれ記した「福音書」というものがある。そこに書かれていることの大部分は、弟子を連れて旅するイエスと人々とのやり取り、イエスが語った神の教えなどであるが、後半に至ってイエスが訴追され、囚われて十字架にかけられる場面となる。その「訴追～十字架～イエスの死」の部分を取り出し一種のドラマとして音楽を付けたもの

が「受難曲」である。物語性があるという点ではオペラやミュージカルのようなものと考えてもいいかもしれないが、ここでは歌手が動き回って演技するわけではなく、あくまで歌と演奏だけですべてを表現する。しかし、物語性があるが故に、その音楽が我々に与える感動は大きい。バッハの受難曲として有名なのは、「マタイによる福音書」と「ヨハネによる福音書」をもとにした2作品である。音楽の作りはだいぶ違うが、聴いても歌っても感激してしまうのはどちらも同じである。6年前、郡司先生の指揮で初めてマタイを歌ったときは、後半の途中で涙が出てきて楽譜が見えないというまことに不本意な出来事が起こったのを思い出す。バッハの受難曲は本当にすごいのだ。

さて、バッハの受難曲は、自由なコーラス、定型的なコラール(讃美歌?)、ソリストによるレシタティーヴォとアリアから構成され、それらをエバンゲリスト(福音史家=以降Evaと記す)役のテノール(T)がつかないで聖書の物語を進行させていく。実はこのEvaの歌い語りが、受難曲の聴きどころでもあるのだが、ドイツ語で物語を進行されても我々には意味がわからないので、その替りに日本語の語りでヨハネ受難曲を演奏しようというのが今回の公演の試みである。日本語の語りがあれば、聖書になじみのない人たちでもイエスの受難の物語がどのように進んでいくのかが容易にわかるので、合唱やアリアの意味が少しは理解しやすくなるだろうと思う。

<ヨハネ受難曲の構成>

それではこの曲の音楽的な構成を見てみよう。

ヨハネ受難曲は、①17曲のコーラス(楽譜には[Coro]と書いてある)、②10曲のコラール(Coral)、③10曲のアリアで構成されている。

①のコーラスは、この受難曲の導入の音楽である「第1曲」のように総括的・俯瞰的な内容のものもあるが、多くは、イエスたちを取り巻く民衆やローマの兵隊などの役割を我々が演じて歌うものである。その歌詞はほぼ聖書に記されている内容に従っている。

②のコラールは、このドラマの現場から離れて、現在の我々が(あるいは普遍的な人類、といってもキリスト教徒だが)イエスの受難について抱く思いを歌う

合唱である。ヨハネのコラールのいくつかは、特に教会で歌われている讃美歌に似た響きを持っている。

③のアリアは、このドラマの中で起こる様々な出来事に関する思いを、ソリストが代表して歌い上げるという感じのものである。それぞれの場面に応じて、ソプラノ(S)、アルト(A)、テノール(T)、バス(B)のプロの歌手がこれを歌う。

そしてこれらの曲をつないでいくのが Eva である。進行役なので聖書に書かれた事柄を淡々と述べていくのが役割なのだが、時として自ら興奮してしまう場面もあるのがバッハの受難曲の特徴でもある。リヒターの指揮する受難曲でしばしば Eva を務めた著名なテノール歌手エルンスト・ヘフリガーは日本公演でもこの役を務めたが、例えば後述する「イエスではなくバラバの方を許せ」と群衆が叫び、ローマの総督ピラトがイエスを鞭打ちにする場面では、謹厳な Eva の仮面を投げ捨てて怒りと抗議の声を上げてしまう。その司会者から演技者への変身ぶりには、思わず聴いている方も血圧が上がってしまったのだった。

なお、Eva による歌い語りの中には、本来はイエス(B)、ペテロ(B)、ピラト(B)、女中(S)、下男(B)などのセリフも入る(ソリストや合唱団員がその役を務める)。しかし今回は Eva による劇の進行の部分をもバス歌手、渡部智也氏による日本語の語りで代替するので、曲全体の印象はだいぶ変わるのではないかと思う。

<ヨハネ受難曲の楽曲達

— 歌い手から見た主観的説明 —

全部を解説することはできないので、私が印象的だと思う曲だけ触れることにしよう。

第1曲: 導入に当たる合唱である。よくマタイ受難曲は私的な感情に訴える曲であり、ヨハネ受難曲は客観的な感情に訴える曲であると言われる。この第1曲はそれを象徴するように、天と地、光と闇、神と人のような世の中の「対比」を表しているとされる。伴奏する弦楽器の動きは「宇宙の真理を示しているのだ」と郡司先生は言われたが(そう言われても、正直に言えばノーベル賞学者が重力波の話をしているのと同じくらい意味不明なのだが)、この伴奏を聴いていると

胸のあたりがざわざわして大変不安になる。その不安感の中で合唱は「Herr! = 主よ！」と天に向かって呼びかけるのである。一方で、B の声としては限界に近い高い音程で「Zeig uns durch deine Passion (受難によって(あなたの栄光を)我々に示してください)」と叫んだかと思うと、「……grossten Niedrichkeit(最も偉大な低さ=天と対比して最低の存在)」というフレーズを歌いながら最低音まで音階を下げていかなければならない、みたいなバツハらしい仕掛けもあって、第1曲から大変なのだが、胸がざわざわするような弦楽器の通奏の中で 10 分間続くこの長大な合唱を楽しんで? 頂きたい。

ペテロの否認: その後、渡部先生の進行に従って、コラールやコーラスや女声のアリアが歌われた後に、有名なペテロの否認のシーンとなる。「お前はイエスの弟子だろう?」と言われて、彼は「そんな人は知らない」と答えてしまうのだ。この「人間の弱さ」を示す場面には、誰もが多かれ少なかれ遭遇した経験があるだろう。特に私は心臓がたいへん小さい人間で、本当のことが言えずに逃げた子供時代の思い出に事欠かないのだが、そのいくつかは今でも心の傷になっているのである。ちなみに 20 年以上前にどうも循環器系に問題があるのではないかと思うことがあって心臓のX線写真を撮ったことがある。その時の医師に「心臓の肥大は認められない。むしろあなたの心臓は小さい。」と言われたので、私の気の小ささは解剖学的にも証明されている。

その後、イエスは捕縛され、大祭司のところに連れていかれるのだが、そこでもペテロは「私は弟子ではない」と3度目の否定をしてしまう。すると鶏が鳴き、「鶏が泣く前にお前は3度否認するだろう」というイエスの予言を思い出したペテロはさめざめと泣く。この場面は Eva の聞かせどころの一つであるので、今回の渡部先生進行版でも中嶋氏(T)が美しい(哀しい?)歌声を聞かせてくれるだろう。この慟哭を受けて、T のアリア、次いでコラールが歌われ、第1部が終了する。

第2部に入って最初のコラールが終わると、イエスが大祭司のところからローマの総督ピラトの屋敷に連

れていかれる場面に移る。そこで群衆がイエスの悪事を調べてくれとピラトに訴えるコーラスが歌われるのだが、これがすごい！

第23曲・25曲の合唱:はじめて第23曲を見た6年前にはたまげた。半音と全音が不規則に混ざり合っている上向ラインあるいは下向ラインの音階が続き、歌っていて気持ち悪くなるようなメロディーになっているのだが、それを各声部がずらしながら歌うのがこの合唱である。群衆のねじれた気持ちと悪意がブンブンするグチャグチャの曲だが、それが最後には統一されてピタッと終わる。バッハは凄いのである。一息入れて第25曲でも同じような悪意のある嘆願が繰り返される。

第29曲:先述した「イエスとバラバのどちらを放免するのか？」の合唱である。その理不尽さに対するEvaの怒りの叫びも、もし続けてやってくれるのであれば聴きたい。

第32曲:ここで歌われるテノールのアリアは必聴である。超難度の曲だということだが、チェロなどの弦楽器との協奏は美しく、心癒される曲でもある。

さらに話は進んで、民衆たちがピラトに「イエスを十字架に架けろ！」と叫ぶ場面もヨハネ受難曲の聴きどころの一つだろう。

第36曲:「十字架に架けろ」はドイツ語では一言「Kreuzige!」(クロイツィゲ!)である。バッハはこの一言だけで24小節にわたるこの合唱曲を作った。またもや4声部が入り乱れてひたすら「Kreuzige!」と叫び続ける恐ろしい曲なのだが、歌っていると遠くの方からソプラノやアルトが同じように叫んでいるのが聞こえてきて、一種の連帯感・恍惚感を感じた前回の経験を思い出す。昔、大学紛争で総長らを糾弾するデモ隊にいて叫んでいた時の若かりし日の感覚が蘇ってくるのだろう。糾弾される側の気分はどのようなものだったのだろうか。今がそのような時代でないことを真に有難く思う次第である。この「Kreuzige!」は、別の合唱やコラールを挟んで、第44曲でも繰り返される。

人間は残酷な生き物である。強者にはへつらいながら、弱者には衆を頼んでさらに厳しく当たるというパターンは今でもよく見られる。第49曲でイエスが十

字架に架けられてからも、「十字架の上に《ユダヤ人の王》ではなく、《ユダヤ人の王を自称した》と書いてくれ」と民衆が訴える合唱(第50曲)、イエスの着衣を誰のものにするかクジを引いて決めようとする兵隊の合唱(第55曲)などがあり、胸の悪くなるようなこれらの歌を歌わなければならない我々もかわいそうなのである。

第60曲:第58曲のアリア(A)のところでイエスの死が歌われるが、その次にBのアリアがある。この曲は、イエスの死によって我々にどのような救済が与えられるのか、いくつかの質問をソリストが投げかけ、それに対する思いを合唱団が歌う、という感じの曲である。バス歌手の歌う旋律上に合唱が所々重なっていく不思議な響きを聴いてほしい。その後、オーボエの響きに乗ったSの素晴らしいアリア(第63曲)があり、この受難曲は終曲へと向かっていく。

第67曲と68曲:コラールを一つ挟んで、第67曲「Ruht Wohl=安らかに眠れ」のコーラスが始まる。マタイの最終曲に相当する感動的な曲であるが、「やさしく静かに歌ってはいけない。ベクトルは反対方向だが、「Kreuzige!」を歌った時と同じエネルギーを持って歌え！」と郡司先生は言われる。歌詞の中にある「私はもう泣きません」という決然とした言葉が重要なのだろう。この曲中112小節から始まる12小節の合唱は格別に美しい。この部分はS、A、Tが歌う。なんと我々Bは指をくわえて聴くだけである。「Bだって歌いた〜い！」と強く思うのだが、バッハが決めたことである。我慢である。目をつむって拝聴するとしよう。それが終わると曲は第67曲の12小節目に戻り、60小節目で終わる。そして、ヨハネ受難曲では本当の終曲としてコラール(第68曲)が置かれている。天に戻ったイエスといずれ再会する喜びを決然と歌い上げるこのコラールをしっかりと歌いたい。

繰り返しになるが、渡部先生の語りを聴けば、曲の進行状況はわかるはずである。それを確認しながら、この受難曲に配置された珠玉の合唱曲やアリアを味わって頂きたい。